

(6) 管理者の認識

一般的に病院図書室は、蔵書の収集、整理保管を目的とし、院内の資料についての利用体制についての方針はたてられています。利用者の情報要求が院外の機関に求めなければならない場合の方法についてはほとんど担当者まかせです。たとえ担当者が院外機関とのコミュニケーションを開発し、ある利用者の文献要求をきっかけにリファレンスワークを始めると「ある特定の個人へのサービス」「個人の研究目的のため」という認識の域を出ず、一つの図書館サービスとして認められない場合もあります。この場合、利用者の要求の度合を考え、委員会等病院として検討してもらう場を作るべきと考えます。

(7) 図書委員会の役割

病院の中において資料を提供するための利用体制を整えねばなりません。これまでそれを阻む色々な要因をあげてまいりました。そして利用方法について病院の中において公式なものとして明文化する必要があると考えました。図書委員会は利用者、担当者の意見を公式に聞きまとめる機関としての役割を担っていると考えられます。アンケートでは、図書委員会はほとんどの病院にあるようですが、

運営規約のあるところは少なく、しかも討議事項も、資料の購入にかたよりがちです。利用サービス体制については少いようです。この原因は、図書委員会の病院における組織上の位置が不明確であること、病院における委員会の権限の小さいこと、そして委員の図書室に対する関心の薄さなどによると思います。

委員の利用体制に対する関心の薄さは、利用者個人としての意見があってもそれを病院の問題としてとりあげていないからではないでしょうか。

これらの問題についての対応策は一朝一夕に出来るものではないかもしれませんが、担当者自身も強力に利用サービス体制の理解を委員会へ働きかけねばならないと思います。以上の報告を皆様のご討議の参考にしていただければ幸いに存じます。

<参考資料>

- 1) 日本図書館協会編：図書館ハンドブック 第4版、VI利用サービス P.309, 1977
- 2) 津田良成：資料の提供、利用のポリシー。医学図書館17(3)：253～258, 1970
- 3) 近畿病院図書室協議会編：医学資料の整理と利用—病院図書室マニュアル—, 1984

利用統計からみた図書室の評価と新たな企画

——北野病院1980年度資料の分析より——

植 手 鉄 男 (北野病院 臨床検査部長 図書室長)

1. 序 論

北野病院においては1966～1967年頃より

図書委員会を設け、図書館の運営とくに収書を行って来た。その後10年をへた1978年より10年間の図書利用を分析し、図書収集が

適切であったかどうかを評価するべく目下作業を進めている。その第1期計画として、1978年より1982年に至る5年間の図書利用を現在分析中である。本論文においては1980年度のデータを提示し、病院図書室の医学書の収集の評価と評価システムへの考案を行った。

2. 北野病院院内所蔵図書利用度と院外図書依存度

北野病院所蔵図書の充実度を分析するためにまず、内蔵している図書の総利用度と外部の各種図書館の御厚意で見せて頂いた頻度いわゆる外部図書依存度についての評価を行った(表1)。

表1 北野病院における院内図書利用と院外図書依存の比率<1980>
(貸出, コピーよりの集計)

	単行書	洋雑誌	和雑誌	計
院内図書利用	280(97%)	1142(68%)	759(75%)	2181(73%)
院外図書依存	9(3%)	536(32%)	259(25%)	804(27%)

※閲覧数不明, 故に院内利用度はもう少し高率

内部依存度は図書の貸出し、図書、論文のコピー依頼件数より算出した。したがって閲覧の件数は入っていない。院外図書依存度は日本医学図書館協会加盟館他の御厚意により援助を頂いた論文のコピー数による利用頻度を集計し算出した。

総利用度より院内利用度と、院外依存度の比率を求めると、院内図書利用度は約70%であった。図書室で閲覧される件数が不明であるので院内利用頻度はもっと上昇する。この事実より大体満足できる図書の充足度が考えられる。

しかし、各科の院内図書利用度と院外依存度の比率を分析すると、院内図書依存度が70%以上あるいは100%の科もあるが、2~3の科において、50%以上を外部の図書に依存する科がみられた。

以上のごとく、総利用頻度の分析よりすると比較的良好的な成績をえたが、充分ではなく、各科の院内、院外利用度を細かく分析することにより詳細な究明がさらに必要であることがわかる。

外部依存図書の質的分析をすることによって、今後いかなる図書を収集すべきかの有力な指針をうることができる。

3. 北野病院における臨床雑誌と基礎医学雑誌利用度と大学医学部、医学研究所図書館におけるこれら雑誌利用度の比較

北野病院所蔵洋雑誌(148雑誌)中の利用ベスト20中の臨床系、基礎系の占める割合を分析すると、基礎医学の雑誌でベスト20に入っているものはない(表2)。

しかし、大学医学部図書館の場合基礎医学雑誌利用率は高く、利用ベスト20洋雑誌中、福島医大45%(1964年)(1)、東京女子医大20%(1964年)(2)、九州大学45%(1967年)(3)、徳島大学45%(1967年)(4)の比率であった(表2)。

表2 北野病院, 大学医学部図書館(福島・東女・徳島・九大)における基礎、臨床医学洋雑誌の利用比率
(ベスト20の比較)

	北野 <1980>	福島* <1964>	東女* <1964>	徳島* <1967>	九大* <1967>
基礎	0(0%)	9(45%)	4(20%)	9(45%)	9(45%)
臨床	20(100%)	11(55%)	16(80%)	11(55%)	11(55%)

* 文献1) 2) 3) 4) より収録

東京大学の1964年の成績も同様に利用洋雑誌ベスト20中、基礎医学雑誌が約40%占めていた。しかし1973年になると約70%に、1979年には約80%と基礎医学雑誌利用のベスト20に占める比率が大となっている(表3)(5,6)。

一方、研究を主たる目的とする国立ガンセンター図書館では1960年代より1970年代の洋雑誌利用ベスト20中65~80%が基礎医学雑誌で占められている(表3)(7,8,9)。

表3 大学医学部図書館（東大）と研究所図書館（国立がんセンター）における基礎、臨床医学洋雑誌の利用比率（ベスト20の比較）

	東大*			国立がんセンター**		
	<1964>	<1973>	<1979>	<1965>	<1969>	<1970>
基礎	8(40%)	14(70%)	16(80%)	16(80%)	14(70%)	13(65%)
臨床	12(60%)	6(30%)	4(20%)	4(20%)	6(30%)	7(35%)

* 文献5) 6) より, ** 文献7), 8), 9) より収録

和雑誌、95誌中、その利用ベスト20誌中の臨床雑誌、基礎医学雑誌の比率を検討した成績は表4に示すごとくである。北野病院、福島医大、東京女子医大の図書館の場合は、和雑誌利用ベスト20中、基礎医学雑誌は5%以下であった(1,2)。しかし、JMLA 加盟49館の調査結果よりすると、利用ベスト20雑誌中10%に基礎医学雑誌が含まれている(10)。

表4 北野病院、大学医学部図書館（福島・東女）及び JMLA 加盟49館における基礎、臨床医学和雑誌の利用比率（ベスト20の比較）

	北野 <1980>	福島* <1964>	東女* <1964>	JMLA** <1965>
基礎	0(0%)	0(0%)	1(5%)	3(15%)
臨床	20(100%)	20(100%)	19(95%)	17(85%)

* 文献1), 2) より ** 文献10) より収録

以上のごとく、洋雑誌の場合大学医学部図書館における基礎医学雑誌利用率は高いが、病院図書室における利用率は低いことが明白に示されている。しかし、和雑誌の基礎医学雑誌の利用率は病院図書室も大学図書館もあまり差がなく低い。

しかしながら注意しなければならないのは病院図書室において基礎医学雑誌がほとんどあるいは全く利用されないかという点、そうではない。北野病院の場合、利用頻度ベスト50～100位に巾広い基礎医学分野の雑誌が利用されている事実が本研究において見られた。この事実は、診療を主たる目的とする一般病院の図書室においても予算の許す限り、利用度の高い基礎医学雑誌をある程度収集するのがよいように思われる。

4. 未利用雑誌の分析

洋雑誌（148タイトル）、和雑誌（95タイ

トル）中、1980年度には洋雑誌、和雑誌共に約20%の未利用雑誌が見られた（表5）。

表5 本院所蔵雑誌中、未利用と思われる雑誌タイトル数<1980>

	洋雑誌	和雑誌
基礎	12/ 29(41%)	2/15(13%)
臨床	17/119(14%)	16/80(20%)
計	29/148(20%)	18/95(19%)

(注) 未利用洋雑誌中 Review 雑誌 8

この調査を施行する約10年前に各科の要望を主に購入雑誌を選択した本図書館の蔵書構成ではあるが、10年をへて評価してみると、このように未利用雑誌が約20%見られたことは、その選択が妥当でない点のあることを示唆していた。中には1～2年のみ未利用であった雑誌もあるが、この調査期間5年間を通じて未利用の臨床雑誌が見られた。このような場合、継続購入を再検討し、外部依存頻度の高い雑誌に切り変える考慮が適切かもしれない。

このような調査はかなり長期間行い、評価、結論を出すべきと思われる。とくに規模の小さい病院においてはスタッフの数も少く、よく勉強をする医師、しない医師、また興味をもつ分野が様々であるので、短期間の調査では妥当でない。たまたま数年の間その分野の勉強しないスタッフがいる場合、未利用という結果がでている。

5. 雑誌発行年度別利用度

本院スタッフの洋雑誌の利用度を雑誌発行年度別に推計してみると、利用度は過去15年間の雑誌が約91%であった。洋雑誌の場合、過去約20年間の雑誌を保存しておれば大体の要求にこたえうると思われた。すなわち利用雑誌の96%が過去20年の間にあった。

和雑誌の場合も、過去15～20年までの間の雑誌の利用率が90%であった。しかし、1980年度の場合「日本臨床」「日本医事新報」「最新医学」「医学のあゆみ」などの総合雑

誌の利用は過去10年間程度ではほぼ100%の要求が満たされていた。しかし、学会雑誌などの原著論文が主に収録されている雑誌では、1960年以前の雑誌の利用が40%にもおぼる雑誌もみられた。研究原著論文を主とする雑誌はポピュラーでないが長く利用される傾向にある。反して、商業的総合雑誌は時流にのった綜説を多く取り扱っており、5～6年から10年程度の寿命の論文が多いように思われた。

なお医学雑誌の寿命についての調査は徳島大学(4)、九州大学(3)よりのものが過去にある。これら大学の調査結果とわれわれ北野病院における1980年度の調査結果とよく類似している(表6)。

表6 北野病院, 徳島大学医学図書館, 九州大学医学図書館における主要雑誌の利用率からみた寿命

	北野病院 <1980>		徳島大学* <1967>		九州大学* <1967>	
	90%	100%	90%	100%	90%	100%
洋雑誌	15年	30年	15~20年	35年	15~20年	25年
和雑誌	10~15年	15~30年	10~15年	10~35年		

* 文献3), 4) より収録

6. 病院図書室の収書への一般的アプローチへの提言

一般的に病院図書室における図書の収集は2つの目的をもって行われる。日常の診療すなわち病気の診断と治療、そして研究とくに臨床研究に役立たせるために集書が病院の規模、予算などに応じて行われる。

日常の病気の診断、治療のためには、どちらかと云えば単行本の収集が主たる柱とされている。一方研究的な目的のためには専門の学術雑誌がより重要となる。勿論専門の学術雑誌は臨床の実際にも役立つ有用な情報を提供してくれる。

学術雑誌収集の場合、洋雑誌を主に集めるか、和雑誌を主に集めて行くか、さらに世に謂われる core journal というような主要とみなされる雑誌を主に集めるかが問題となる。

そしてどの程度総合雑誌を、またどの程度

の専門雑誌が予算に応じて入手しうるかなどを病院の特殊性、規模に応じて、病院独自に定められるべきである。

しかし、本研究でも明らかなごとく大学医学図書館あるいは研究所図書館の蔵書構成の質的な考え方をそのまま病院にあてはめるわけにはいかない。病院の多くはその主たる目的が日常の診療という臨床にあるため、臨床系の有意義な蔵書構成への配慮がまず払われなければならない。そしてそれを補う、基礎医学雑誌の収集を考慮するのが予算の配分上妥当と考えられる。

そこで多くの人が提言している収書の方法へのアプローチを考えて見ると次の3点をまず考慮すべきである(表7)。

表7 図書収集のアプローチ

1. 専門家の推薦
2. Citation Counting
引用文献よりの考察(Gross and Gross)
3. Circulation Counting
利用頻度よりの考察

1) 専門家の推薦。まずその分野の専門家の意見をきき蔵書構成への足がかりにするのがもっとも好ましい。しかし、この場合も病院の場合、あくまで臨床の診断、治療面に役立つとの配慮より視野を広げて行くべきである。

2) Citation counting. 色々な学術論文に引用された論文の由来する雑誌を考慮する方法である(11)。しかし、この方法でも論文が臨床的なものか、実験的なものかによって引用論文由来雑誌の質的な差異がでてくる。今迄、このような分類を同じ雑誌の中の論文において分類し、系統的に報告されたものはあまりないようである。

3) Circulation counting. 利用頻度を考慮して集書の基本とする方法である(12,13)。一般的によく利用される雑誌を中心に収集して行くとする考え方。この場合においても大

学図書館で利用される頻度の高いものが病院の診療目的に真に有意義かどうかの問題がある。

以上の3点より病院の特殊性を考慮して、蔵書構成を行うべきである。

医学図書館の収書方法に関する論文は今迄多数出版されている。大沢(14)、関口(15)、三宅(16)、野口(17)、村上(18)、西岡(19)諸氏の見解を参照されたい。

医学図書館は大別して3群に分けられる(表8)。研究を主たる目的とする研究所図

表8 医学図書館の分類

1. Clinical Medical Library	→病院図書館
2. Scientific Clinical Medical Library	→医科大学図書館
3. Scientific Medical Library	→研究所図書館

書館、また教育と同時に研究の使命をもつ大学図書館、そして診療を主たる目的とする病院図書館がある。病院図書室は clinical medical library、大学医学部図書館は scientific, clinical medical library、研究所図書館は scientific medical library と位置づけられている。このような体質に応じて、収書はより経済的に、効率的に行われるべきであることをとくに考慮せねばならない。

7. 蔵書構成への評価——本研究結果よりの提言

色々な角度より慎重にベストと思われる方法で収書が行われても、果してうまく図書館が機能し、病院スタッフの要望に応じているか、医療活動に充分奉仕しうる蔵書構成であるかを吟味する必要がある。

われわれは、10年計画でこの問題をとりあげ、その第1期計画として、5年間の図書利用率の量的、質的分析を行っている。本研究の一部の1980年度の結果を本シンポジウムに提出したわけであるが、その結果より蔵書構成の評価について次のごとき分析を私は

提言したい。

1) 利用頻度とくに院内図書の利用度と院外図書依存度を量的に検討する。われわれは院内図書貸出、コピー件数より集計を行ったが、医師などへのアンケート調査などを含めてより正確な方法で分析するのが一層有意義と思われる。

院内図書利用度と院外図書依存度を検討することによって、図書室の蔵書構成の充足度を知り得る。病院全体の総利用度、依存度を吟味するのみならず、各科別に院内図書利用度と外部図書依存度を分析することによってより詳細な情報がえられる。

2) 雑誌の質的な利用頻度分析を院内図書および外部依存図書について吟味した場合、さらにどの雑誌が今後必要であるかがわかる。

3) 未利用雑誌の検討を行い必要な雑誌への切り換えを行うことも小規模な病院図書室予算を有効に使用するために必要であるかもしれない。

4) 分野別雑誌の利用頻度を検討することも、各分野における雑誌の占める位置、ポピュラリティへの考察、さらに将来分野別の蔵書構成をより良くするための示唆をうることができる。

以上のごとき点の分析結果は恐らく、図書室の蔵書構成の充足度の評価に対して有意義な情報を提供する。そして将来さらにどのようにしたらより充実した図書室になるかのアイデアをうる事が可能であろう。

<文献>

- 1) 丹野要、Circulation counting 医学図書館 11, 177-184, 1964
- 2) 井田章子、雑誌利用度調査—東京女子医大図書館—医学図書館 11, 193-198, 1964
- 3) 山川幸雄、医学逐次刊行物の寿命調査、医学図書館 14, 253-264, 1967
- 4) 尾原忠雄、医学逐次刊行物の寿命調査、—徳島大学医学図書館主要雑誌を主体として、医学図書館 14, 241-251, 1967
- 5) 今村慶之助、青木孝雄、複写利用頻度か

- らみた重要雑誌——東大医学図書館統計より——医学図書館 11, 185-191, 1964
- 6) 関川雅彦、田辺文子、東京大学図書館の洋雑誌貸出統計分析、医学図書館 30, 134-139, 1983
 - 7) 本田品子、国立がんセンターにおける雑誌の利用調査、医学図書館12, 191-203, 1965
 - 8) 本田品子、長谷川湧子、国立がんセンター図書館における資料利用の動向とその理由、医学図書館 18, 227-232, 1971
 - 9) 前田和博、河島裕子、本田品子、国立がんセンター図書館における貸出利用統計、医学図書館 26, 71-77, 1979
 - 10) 津田良成、裏田武夫監修、河辺敦子、近藤きみ集計、Index Medicus 収録和雑誌および協会加盟館における重要和雑誌、医学図書館 12, 231-259, 1965
 - 11) Gross, P. L. K. and Gross, E. M., College libraries and chemical education. Science 66, 385-389, 1927
 - 12) Hunt, J.W., Periodicals for the small bio-medical and clinical library. Libr. Quart. 7, 121-140, 1937
 - 13) Barnard, C. C., Selection of periodicals for medical and scientific libraries Lib. Ass. Rec. 40, 549-557, 1938
 - 14) 大沢充、逐次刊行物の選択(1)—総括—医学図書館 12, 1-12, 1965
 - 15) 関口昌樹、資料の収集、特に選択のポリシーについて—その背景的諸要素の考察—医学図書館 16, 1-8, 1969
 - 16) 三宅英子、医学図書館における資料の選択に用いられる資料(雑誌)、医学図書館 16, 77-84, 1969
 - 17) 野口迪子、医学図書館における逐次刊行物と継続出版物 選択—特に継続出版物について、医学図書館 16, 9-13, 1969
 - 18) 村上宏、雑誌の選択と Core journals、医学図書館 24, 105-110, 1977
 - 19) 西岡正行、医学図書館における雑誌の選択・評価、医学図書館 28, 268-282, 1981

図書委員会における司書の役割

足立純子 (聖路加国際病院 医学図書室係長 司書)

私に与えられたテーマは、「図書委員会における司書の役割」ということですので私なりに考えたことを、お話してみたいとおもいます。司書、殊に病院の図書室の司書というのは、図書委員会とは何か、レファレンス・サービスとは何かを考えるよりも、レファレンス・サービスなりを気がつかないうちに行っているんですね。そこが、強みでもあり、

弱みでもある訳です。では自分がやっていたものが果して良かったのかどうかを、時には、考えることも必要だろうと思います。今日御出席の皆さんは、図書委員会をお持ちであれば、それなりに司書としての役割を果たしていらっしゃると思いますが、こういう機会に、もう一度自分の役割が果して、これでいいのかどうか、あるいは、今以上のことができる